

千葉・埼玉地区

いつもそこにいる安心感

ふと感じる盲導犬のぬくもり。いってくれるだけでいい。おかげで意欲と希望がわくのだから。



と 翔びつづけたい、

いつまでも ～試練もチャージング・ポイントに

櫻井ようこさん(60) / 埼玉県 / 神

スカイ (GS ♀) ← アンソニー (LR ♂)

芝居もダンスも初めての挑戦

「1日に何十回も、ありがとうが言えてる」——いつもしみじみと幸せを感じている櫻井さんだ。

2017年2月、東京日本橋の三越劇場での劇団「は～とふる♡はんど」の第16回公演『ありがとう、またね…』で、2日間4回の花嫁幸子役を務めあげた。それもパートナーのスカイと一緒にの舞台で。

2日目午前の部開演の時間には、デパート前の中央通りを東京マラソンの長い集団が色とりどりのユニホームで走っていた。満席の会場には岩手、福島、新潟からもかけつけたユーザー仲間と5頭の盲導犬の姿があった。

劇の筋は、結婚式直前に盲目の花嫁幸子が「結婚なんて考えるんじゃなかった」と突然言いだした式場の混乱が収まるまでのストーリーだが、ウェディングドレスの櫻井さんは可憐で美しく、白いシェパードのスカイは堂々と舞台映えていた。2部の手話ダンスにも群舞の一人として踊り、主宰の山辺ユリコさんはフィナーレでも櫻井さんとスカイの出番を用意して、盲導犬のPRに一役買ってくれさせた。

目は5円玉の穴ぐらいの視野で光を感じる程度、耳も高度難聴型補聴器をつけてやっとの二重障害の櫻井さんだが、前年の舞台に感激して入団した。演劇もダンスも初めての経験。監修はあの石井ふく子さん、演出の山辺さん、共演の藤田朋子さんや穂積隆信さんら、プロの厳しく温かい指導と助言を受けて積んだ稽古の成果だった。

「網膜色素変性症」という病名が告げられたのは32歳の夏。夫と行った花火大会で、ドーンという音はするけど花火の光を追うことが出来ない自分の視野に気づいた。近くの総合病院で「いずれ失明します。難病でいまは治療法も薬もありません」と宣告された。「いつ見えなくなるのか、なぜ自分が、ほんとに治療法はないのか」——それからの2年余は自分を納得させるための病院遍歴の旅だった。うす暗い部屋での検査のあと返ってくる診断はいつも同じで、求める答えには遠い。「人に迷惑はかけたくない。できることはなんでも一人でやりたい」性格から、自分が納得出来ない病気のことを夫にも実家の両親にも話せなかった。

残っている能力を生かそうね

そして34歳。櫻井さんが「恩師」と呼ぶ眼科医の早川むつ子先生に行き着く。初めて明るい診察室で、目と耳も聞きづらくなっている症状を聞いて、先生の診断は「アッシャー症候群」。網膜色素変性症もその症状の一つで、聴覚も衰えていく難病。原因は遺伝によるものが多いが突然発病する例もあるという。「失っていくものを考えるんじゃなくて、今ある能力を生かそう



▲舞台衣装の櫻井さんとスカイ (写真提供: は～とふる♡はんど)

ね」——この一言に救われた。先生はまた、国立身体障害者リハビリセンターのロービジョンクリニックも紹介してくれた。

納得すれば行動は早い。夫や両親にも話し、その後もデパートのハーブショップ勤務を続けていたが、作中に足元を歩いている小さな子どもにぶつかって転ばしてしまっただ。視野が狭くなり腰から下の高さは見えなくなっていたのだ。翌日白杖を買い、1週間泊まり込みで訓練も受けたが、店に迷惑をかけるのも心苦しくて勤めを辞めた。

「あなたのように社交的でほがらかに話せる人は、絶対はり灸マッサージ師が最適よ」——相談したセンターのソーシャルワーカーの助言で3年制の専門学校へ。補聴器訓練の1年を加え4年間で卒業し、治療院への就職も決まった。

白杖歩行にもある程度自信がついた頃、第2の試練が襲う。朝の出勤時、ホームで電車を待っていたとき後ろから駆け込んできた人にぶつかられ、ホームから転落して、肋骨骨折、左足の靭帯断裂、ほほが切れ歯も折れる全治2か月の重傷を負った。



けがもひどいが、そのあと襲われた電車に乗ることへの恐怖心から金縛りにあう。「あの時もし電車が入って来たら……」ホームまでは行けても次の一歩の足が動かない。1時間以上も立ちつくしたこともあった。2度目

◀引退後のアンソニーを富士ハynesに訪ね、スカイとのスリショット

の失明をした思いに心が折れそうになった。

盲導犬アンソニーに出会ったのは2004年5月。病名の宣告を受けてから15年がたった。貸与申し込みからも1年余。協会はユーザーに最も適した犬選びに時間をかける。ホームなどで危険な場合は踏んばってユーザーを止める力、職場やお客の前ではおとなしく寝て待てるアンソニー。ユーザーになるためのもう一つのハードル、白杖や盲導犬を持つということは自分が障害者である看板を背負って歩いているようなものという「ためらい」は、4週間の共同訓練でアンソニーから覚悟の程を試されているようで脱ぎ捨てられた。

盲導犬を得てからの櫻井さんは水を得た魚のよう。盲導犬の啓発活動や講演には積極的に参加。自然が好きで若い頃には仕事にしたこと

もあるダイビングやロッククライミングにも挑戦した。協会から誘われて中国での盲導犬交流会に参加し、特別許可されて万里の長城をアンソニーと歩いた。著作『アンソニー きみがいるから』を出版し、書くことで、日本語の美しさに引かれ詩を書いたり美術を専攻した学生時代も、やがて和太鼓やピアノにと、聞こえないながらもチャレンジしていく。

アメリカから捜してきたスカイ

2頭目のスカイの時は、もっと条件が厳しくなっていた。櫻井さんの進行性聴覚障害が更に進み、街中では全盲ろう者に近い状態だった。このため本人も盲導犬はアンソニーで終わりにしようかと考えていた。明るく活動的な櫻井さんには、街中でも目立って援助が受けやすく、踏んばる力も強い、音に敏感で遠くから近づく車にも対応が早い犬が必要だ。多和田理事がアメリカまで捜して選んだのが純白のシェパード・スカイだった。それもアンソニーの引退が分かっていたので、準備して引退と間髪を入れず共同訓練でバトンタッチした。

「翔びつづけたい いつまでも」——著書の表紙裏に筆ペンの先を下ろす位置を手探りしながらサインする櫻井さん。「1頭の犬が隣にいただけで、思ってもみない方へ人生が進んでいく。見えていたらおそらく会えなかった大勢の人にも、犬のおかげで丸ごと受け入れられた。これはむしろチャージング・ポイントではないのかな」と言う。そして盲導犬を迷っている人には、「盲導犬を持った自分と持たない自分をイメージしてみるといい。私は持たないと絶対に後悔すると思って一緒に人生を歩く道を選んだ」とアドバイスを贈る。

「さあ、明日から仕事、仕事！」——三越劇場の終演後の楽屋に、持ち前の明るい声が響いていた。(取材)

“ひとりで出来る、料理教室 ～まず家庭内復帰から

前川花子さん (76) / 千葉県 / 袖

エドナ (LR ♀) ← エリス (LR ♀) ← マリリン (LR ♀)

← インディー (LR ♀) ← マリ (LR ♀) ← サーバ (GS ♀)

盲導犬歴45年の前川さんは、日本盲導犬協会の草創期からを知るレジェンドです。中学くらいまでは近視でもなんとか見えていた視力を病名不明のまま失いました。なにしろ恒久的な施設もまだなく、犬も訓練士も少ない時代。都バスに盲導犬連れで乗れるようになった1973年には、バスの中に愛犬サーバとペアのポスターが貼られた。TV出演ではサーバがカメラや

コードを気にして歩こうとせず、「生放送ですよ！」と現場はパニックに。首相官邸での小淵総理への陳情では、総理入室の際は全員起立して迎えるという約束を忘れて、前川さんだけ座ったまま、マリリンはグウグウ高いびきと、エピソードにはこと欠きません。



▲1970年代の小金井訓練センター。開所当時のユーザーである前川さんとサーバ



▲2000年(平成12年)3月、盲導犬への理解を求めるため首相官邸へ。写真中央が前川さんとマリリン

ベテラン先生と友の会の支え

千葉県市川市で「視覚障害者家庭生活研究会」を主宰して、その前の料理講習会の4年を加えると24年続いています。視覚障害になると家族に世話をされる立場になる。とくに途中失明の場合は立場逆転です。せめて料理で家庭内復帰が出来れば、やがて社会復帰にもつながるという思いからです。だから野菜洗いから下拵え・調理・後片付けまで、全部一人でやって覚えるのを原則としています。講師には、前川さんが最初に歩行訓練に通った東京都心身障害者福祉センターで教わった



▲前川さんとエドナ
◀前川さんも教室では生徒。4人分作ったコーヒーゼリーをつぎ分ける手元を見つめる鈴木先生

鈴木文子先生が、91歳の今でも通って下さる。障害者の実生活に即した講習の草分けです。茹でるスパゲッティの150グラムは束を持った感じで覚える。4人分作ったゼリーをつぎ分けるのも器を片手で持った重さで平等にという調子です。

市の男女共同参画センターの調理工房を借り、市川友の会の応援を得てマンツーマン体制だが、調理に手出しはいっさいご法度。食材の手配から調理中の安全、会計まで、生徒より多いボランティアさんに支えられ、「こんな教室はほかにはない。先生と友の会のおかげ」と前川さん。調理台とガスコンロの数から1回8名、月に16名が限度だが、最近はおさんを亡くして一人暮らしの男性も参加してみるみる明るさを取りもどし、教室にも活気を呼び込んでいます。

犬が代われればユーザーも^{ゼロ}0から

前川さんは、盲導犬使用の先達としての責任感が強かった。1971年に東京虎ノ門ライオンズクラブから5頭の盲導犬の寄贈を受けたとき、「ここで私たちが失敗したら活動全体がダメになる。絶対、盲導犬と暮らすんだという覚悟で」真剣勝負で共同訓練に取り組んだ結果が1頭目のサーバです。今のエドナは6頭目のパートナー。45年間で6頭ですから、犬も優秀、ユーザーも優秀ということでしょうが、「犬が代わったら人間もゼロになってやり直し」というのが前川さんのコツのようです。人間の子供と同じで一頭一頭が全然違う。しかも前の犬はベテラン新しい子はルーキー、比べてはかわいそうだしユーザーにとってもマイナスというわけです。

サーバはシェパードで、体形がよく、頭の回転が速く機転もきいたが、当時の訓練は調教の色が濃く、よく訓練士に「叱りなさい」と言われて、前川さんも「NO」が多かった。2頭目のマリはピチピチ元気で外出好きだが、仕事は大ざっぱなところがあつた。3頭目のインディとは障害者向けに企画された団体旅行で3度も海外に行った。ロダンの考える人に触った。地中海の潮で濡れてみた、インディは逃げたが。ナイアガラの音としぶきを浴びた。マリリンは遊びたい盛りの甘ったれだが、ハーネスをつけると仕事の顔になった。エリスはレストランのテーブルの下で寝ていて、皿の食べ物を落とすとパツと食べる子だった。エドナはまったく反対の慎重派で、落ちた物など見向きもしないし、初めての所にはすぐには入らない。急ぐときは「もっと速く歩けないの?」と言いたくなる——楽しそうに話す前川さんです。

盲導犬使用を迷っている人への前川さんのアドバイスは、「とにかく一度体験してみる。自分は白杖で歩いていたから犬に替わったらまったく楽だったが」という。駅では1本向こうのホームの電車の音と間違えやすく、新宿駅のような線の多い駅では電車のドアの開閉音が聞こえなくなることもあるそうです。盲導犬に対する社会の変化も、この4、5年前から実感しています。道路を渡るとき、以前は関心はあるが遠くから見ていた感じがしたが、「大丈夫ですか?」と声をかけてくれることが多くなりました。(取材)

もう一度、盲導犬と歩こう

阿部貞信さん(73) / 千葉県 / 神

ジュライ(LR♂) ← ジャム(MK♀)

今年73歳を迎えた私は、30代半ばで網膜色素変性症になってから中途視覚障害者として、生活は大きく変わりました。当時の私は白杖歩行に抵抗があり、一人での外出は不安と危険ばかりでした。身近な友人に盲導犬ユーザーがいたので、盲導犬と歩こうと決めるまでさほど時間はかかりませんでした。

2000年9月に共同訓練が始まりました。パートナーとの対面は一生忘れられない瞬間です。盲導犬との歩行は苦勞や困難も多くありましたが、信頼や絆の深まりとともに、歩む喜びや幸せは数え切れないほどになりました。盲導犬が、毎日を元気で充実したものにしてくれたのです。

1頭目のパートナーをみつめてからは、少し時間が空きました。

年齢、体力など不安も多く、悩みはつきませんでした。自身の健康と仕事を継続していきたい思いで「もう一度、盲導犬と歩こう」と強く願いました。そして2頭目のジュライ号とともに



▲ジュライは「通勤の目、になって毎日を支えてくれています」

歩み、2年が過ぎたところです。元気なジュライの存在は大きな喜びであり、共にたくさん歩く幸せを日々感じています。「ジュライ、私のパートナーでいてくれてありがとう」。これからも一緒に元気で頑張ろうと思います。盲導犬が傍らにいてくれる日々感謝の気持ちでいっぱいです。

アロン、モカ、ビビ、3頭の盲導犬と歩んだ日々

廣崎順子さん(70) / 千葉県 / 神

ビビ(LR♀) ← モカ(LR♀) ← アロン(LR♂)

私が盲導犬と出会ったのは中途視覚障害者の集まり。訓練士さんの話を聞き、盲導犬と歩いて私の心に希望がとまりました。すぐに申し込みました。訓練センターで最初に会った子が大きくて印象が強かったのですが、訓練時に対面したのがその子だったので、驚きとうれしさでいっぱいになり、涙が出てしまいました。その子が1頭目のアロンです。2004年秋のことです。

それからは、飛行機や新幹線に乗って旅行に行くこともできるようになりました。2頭目のモカは体の小さい女の子でしたが、3年した頃に胆石になってしまい、手術は成功しましたが訓練士さんと話し合い、早めにリタイアさせることになりました。別れの時は寂しくて、夜に泣いてしまいました。3頭目のビビはア

ロンの子。驚きました。美人の女の子です。船橋の作業所に電車を乗り換えて行っているのですが、いろんな人にかわいいと言われます。皆さんに言われると鼻が高くなります。

ダウンしていた時に、高校生のグループに前足を蹴られたことがありましたが、周りの男性がその子たちを怒ってくれました。盲導犬の事故があったから、皆さんがいつも見ていてくれます。初めての盲導犬の時に比べて、今は盲導犬への理解も深まり、安心して電車で通えるようになりました。



◀自宅でリラックス。甘えるビビです

人生のキーワードは「 Dank (感謝) 」

金子正次郎さん(73) / 埼玉県 / 神

Dank(LR♂) ← スマイル(LR♀)

4頭目のパートナー・Dankは現在3歳。ラブラドル・レトリバーの雄です。Dankと一緒に歩き始めたのは2016年の5月。初めての「黒ラブ」です。

真っ黒な容姿で近所の人もすぐに「新入り」と気づくようで、「新しいワンちゃんだね」と良く声をかけられます。歩きはとても丁寧ですが、なぜか朝だけは速足でブレーキをかけるのにも一苦勞。もちろん、しばらくすれば快適な速度に落ち着いてくれますが。

ところで、Dankのハウスは1階にある僕が営む「あはき業」の待合室の一角。私の居住スペースは2階。しかもDankは決して治療室には入って来ないため、どうしても一人にさせてしまう

時間が長くなります。そのため毎日、時間を見つけてボンディング(あおむけだっこ)をして補っていますが、そんな気持ちが通じているのか、Dankは朝晩の食事が終わった後に僕の手を鼻先でつついてくれるのです。そのとでもかわいいサインは「食べ終わったよ。ごちそうさま」と、私には聞こえます。



▲Dankとのボンディングの時間。時には30分以上も続くことも

「Dank」とはドイツ語で「感謝」の意味だそうです。僕はDankとの生活を感謝の心で歩みたい。そして「Dank」を残された僕の人生のキーワードにしたいと思っています。

三頭三様の盲導犬に感心してきました

福井恵子さん(67) / 埼玉県 / 神

ピーチ(LR♀) ← ネネ(LR♀) ← カレン(LR♀)

1頭目の盲導犬カレンと立川防災館で震度5強の体験をした際に素早く机の下へ潜り、落ち着いた態度で指示を待つカレンが皆さんから絶賛されたことは深く心に刻まれています。

2頭目のネネと出会った頃は、国道16号の拡幅工事が本格化し、工事の騒音で肝心な音を聞き逃さないように注意を払い、



迂回路^{うかいろう}を覚えるのに必死でした。状況の目まぐるしい変化にもめげず頑張り抜いたネネは、小中学校の福祉体験学習やイベントにも度々お呼ばれして、ファンたちに囲まれていました。

3頭目はピーチ。前の2頭と安全に利用していた歩道橋が撤去され、大交差点になりました。大型車が頻繁に往来する慣れない交差点を通過するときは、堂々たる態度で物怖じしないピーチに励まされ、安心感を得られています。

やんちゃで甘え上手なカレン、おとなしそうに見えてちょっと頑固なネネ、ピーチは決して慌てず騒がずのんびり屋さん。それまでほとんど家の中で過ごしていた私が、出かけた時に出かけ、新しいことにチャレンジし、できることが一つずつ増えています。これからも安全・安心・快適な盲導犬歩行を大いに楽しみたい。今日も「ピーちゃん、グッド」。



▲できることが一つずつ増えるのも、このピーちゃんのおかげ
◀ひざで甘えるピーちゃん

お母さんと私の知恵比べ?

森 公子さん(72) / 千葉県 / 神

グリーンナ(LR♀) ← シェリー(LR♀)



▲友人宅の庭にて、1頭目のシェリーと

私、森シェリーです。お母さんと出会って初めての夏、市役所での仕事の帰り、焼けついたアスファルトを30分歩かせるのはかわいそうと思ったのでしょ、最寄駅から「タクシー」という乗り物に乗せてくれたんです。外は34、35度と猛烈に暑かったのに、中はクーラーが利いていて気持ちがよく、あっという間に家に着いちゃった。私すっ

かり気に入ってしまいました。

で、駅を利用するたびに力ずくでお母さんをタクシー乗り場へと引っ張るようになったの。「乗る」「歩く」でもめていると運転手さんが窓から顔を出して「わんちゃんこっちこっち」って呼ぶようになっちゃって。お母さんは苦笑だけど、私は「やったあ」です。

駅のタクシー乗り場って右側なのね。左側通行じゃスムーズ

に乗り場へ誘導できないので、右側の手すりに沿って外へ出るよう作戦をめぐらしました。お母さん笑いながら「シェリーちゃんなかなか策士やのう」って私のほっぺをほんぽんしてくれます。でも、私も今年4月に引退し、2009年2月から一緒のお母さんとお別れしなければなりませんでした。6月から後を継いでくれたのがグリーンナちゃん。多忙で外出の多いお母さんをよろしくね。



▲シェリーと盲導犬フェアに参加して(前列中央、2015年5月)

盲導犬のおかげで広い世界に出た

土屋直樹さん(51) / 千葉県 / 神

オーロラ (LR ♀) ←ライム (LR ♂)

初めて盲導犬に触ったのは、18年前の栃木盲導犬センターでのことです。その時に体験歩行をさせてもらいました。まだ白杖さえあればどこへでも行けると思っていたので、盲導犬歩行は考えもしませんでした。その後、テレビで盲導犬の番組を見たり、身近に盲導犬を使っている人がいたりして、盲導犬歩行に対して魅力を感じるようになっていました。本格的に盲導犬を持ちたいと思ったのは2002年ごろ。仕事の出張マッサージに生かし、通院に使えたらと思ったのがきっかけでした。

2004年5月、1頭目のライムが我が家に来ました。通院はもちろん仕事にも活躍をしてくれました。ほかにも県内のユーザーの会への参加、学校での講演、募金活動などいろいろなイベントに参加させてもらえました。年に1度の旅行、盲導犬同伴で人工透析を受けられる病院を探したことも楽しい思い出になりました。

2011年10月、ライムは僕の勝手な都合で早く退役しました。仕事のスキルアップのために専門学校に入るからです。その月に2頭目のオーロラがきました。オーロラを連れての入所なのでセンターとの話し合いはスムーズにはいかず、決定が出たのは入所2か月前でした。センターではオーロラとどのように向き合うのか、体調不良になりかけたらどうするのか、など状況

に応じてその場、その場で話し合いながら、他の生徒も楽しく過ごせるようにしていただきました。春の体育祭にはオーロラも大玉ころがしに参加し、秋の文化祭では見学に来た人に盲導犬のことを聞かれたり、オーロラと触れ合ってもらったりして楽しみました。僕、オーロラ共ども楽しい学園生活を無事に3年間過ごすことができました。専門学校が終了してもオーロラの仕事が終わったわけではありません。月、水、金曜には通院があり、病室のベッドサイドでの長い待機に散歩。盲導犬は僕の生活、心を広げてくれました。



▲「オーロラは僕を広い世界に引っ張り出してくれた」

パートナーと一緒に歩くことの喜び

高橋静枝さん(61) / 千葉県 / 神

カリン (LR ♀) ←クリス (LR ♂) ←キャンディー (LR ♀)

2009年に初めて迎えたラブラドルのパートナー。これまでに合わせて3頭と暮らしていますが、この子たちのおかげで私の生活と行動は180度変わりました。

家の周辺を散歩することから始め、今ではパートナーとどこへでも行ってしまふようになりました。行動範囲が広がり活動的になったのです。住まいは田舎ですが、近年は都会の事情にも通じるようになりました。口実をつくってはパートナーと出かけ、旅行など遠出するようにもなりました。

何よりも若い頃に大ファンだった歌手のコンサートに行けた時はとてもうれしかったです。歌には記憶を喚起するする力があるとよく言われます。実際にはあの時代の年齢に戻れるわけ

ではありませんが、歌の響きに合わせるかのように私はすっかり往時の気分になり、胸はドキドキし放しでした。その感動と興奮の中に身を置き、パートナーと会話している私。相手は何も言ってくれませんが、歌を聴いた余韻はしばらく消えませんでした。



三人の子たちに勇気をたくさんもらい、人の優しさも知りました。人は優しさに触れて、自らも優しくなれるのでしょう。感謝の思いを胸に刻みつけ、パートナーと歩み続けます。

◀大ファンだった歌手の野口五郎さんのディナーショーで記念撮影しました

ジュディと二人で出来ることをさがして

斉藤雅子さん(61) / 埼玉県 / 富

ジュディ (LR ♀)

今年2月からジュディと暮らしています。私が盲導犬のことを知り、パートナーにと願ってから2年以上たっていました。

以前から見える範囲は狭かったのですが、3年くらい前に道を歩いていて誰かが私にぶつかってきました。高齢男性から「どこを見て歩いているんだ」とどなられショックを受けました。大学病院で診察を受けると「視力は網膜の萎縮のため治療方法はない」との診断でした。今の目の見え方で生活しなくてはならなくなりました。

なんとか一人で外出できるようにしたい。さがし続けてたどりついたのが、デパートで行われていた盲導犬のPR活動です。初めて盲導犬と歩行体験もし、神奈川訓練センターでの1泊2日の宿泊体験も経て盲導犬貸与をお願いしました。盲導犬がいれば、これからの生きがいにと目指していた「傾聴ボランティア」で老人ホームなどに行き、お年寄りの話を聞き、寄り添うことができます。私自身も、少しでも世の中



◀入間市市民活動センター「イルミン」で傾聴ボランティアの方々と。前列右が斉藤さん

水面に広がる「波紋」のように

井出茂樹さん(42) / 埼玉県 / 神

ロンド (LR ♂) ←ウィッシュ (LR ♂)

ずっと考えていました。光を失うその瞬間、「最後に見たいものは何だろう」と。

我が家に初めて来た盲導犬がウィッシュ。難病を発病してから5年後の2008年8月でした。ウィッシュは私の目として一緒に歩くパートナーとしていろんな場所へ行き、またその愛嬌ある振る舞いがたくさんの人を笑顔にしました。そんな笑顔を運んでくるウィッシュに感謝すると同時に、「私はウィッシュに何をしてやれるのだろうか」と思っていました。全国の盲導犬の中の1頭ではなく、何かで一番にしてやりたい。

そんな思いが芽生え、思いついたのがウィッシュに市民権、つまり住民票を交付してもらうということでした。どんな事でもそうですが、前例がないことをやるのは時間がかかります。それでも思い立ってから半年後にはウィッシュに特別住民票が交付されたのでした。

そんなウィッシュも10歳で引退し、2

の役に立つと思えば元気になれます。盲導犬がいつ来るのかわからないけれど、その間も地元の視覚障害者の会に入り、音声パソコンの練習や盲導犬の知識を深め、並行して傾聴ボランティアの講習も受けました。

そして今年1月、富士ハーネスでジュディとの3週間の共同訓練が始まりました。家では朝早く起きられない私が5時には目が覚め、水と餌を与え、手入れをする。自分の朝食をすませたらスーパーなどで歩行訓練を行い、夜もジュディの世話をしてから寝る。富士山直下の寒さも気になりませんでした。

ジュディが来てからは、週1回公民館の自彊術に通い、今まで一人では入れなかった喫茶店やレストランも楽しめます。そして心の持ち方が変わってきたと感じています。この2年ほどは人から援護を受けるだけでしたが、ジュディとこれから何が出来るか考えると、いろんな楽しいことが思い浮かびます。盲導犬からは歩行や運動だけでなく、楽しい人生を送る手助けをしていただけたと実感しています。

頭目のパートナーと出会います。それがロンドです。ウィッシュの時から始めた講演活動ですが、ロンドにも引き継いでもらいたいと、共同訓練の時から早くも講演デビュー。そして我が家に来て4か月後にはロンドにも住民票と補助犬では初のマイナンバーが交付されました。驚くことに、この住民票取得という流れが広まりつつあるのです。以前にイベントで一緒になった介助犬、聴導犬にも住民票が交付されたのです。その他にも静岡県、山口県でも盲導犬に交付されています。波紋のようにゆっくりと広まっていき、そこに住む補助犬たちの認知度が高くなり、ユーザーたちももっともっと笑顔になればいいなと切に願います。

微力ながらそんな一石を投じることができたのもウィッシュとロンドに出会えたからです。笑顔の波紋が広がるようにこれからも盲導犬と歩いていきたいと思っています。「最後に見たいもの」。今ならばはっきりと答えられます。「笑顔です！」



◀ロンドに住民票とマイナンバーが交付されました